

総説

相模湾・東京湾沿岸で記録された鰭脚類について

崎山直夫・花上諒大・鷺見みゆき・鈴木 聡・石川 創・  
山田 格・田島木綿子・樽 創

Tadao Sakiyama, Ryota Hanaue, Miyuki Sumi, Satoshi Suzuki,  
Hajime Ishikawa, Tadasu K. Yamada, Yuko Tajima and Hajime Taru:  
Review of sighting, stranding, and bycatch reports of Pinnipeds  
along the coast of Sagami and Tokyo Bays

**Abstract.** The occurrence of pinnipeds of the families Phocidae and Otariidae have been documented along the coasts of the Sagami and Tokyo Bays, Japan, based on records present in diverse databases, journals, reports, and articles. This review analyzed historical sightings of Pinnipedia in the Sagami and Tokyo Bays from 1879 to 2023. A total of 37 records encompassing five seal species and three sea lion species were validated, with no reports of walruses (Odobenidae) in the region. Noteworthy findings included two old reports of the Japanese sea lion (*Zalophus japonicus*), designated as extinct by the International Union for Conservation of Nature, one extralimital sighting of the northern elephant seal (*Mirounga angustirostris*), and a record of ribbon seals (*Histriophoca fasciata*) at the southernmost region of Japan. Therefore, this comprehensive review provides valuable insights for future investigations on Pinnipedia.

緒言

日本沿岸の鰭脚類（アザラシ科、アシカ科、セイウチ科）の記録は、「海棲哺乳類ストランディングデータベース」（国立科学博物館, online）や、日本鯨類研究所発行の「鯨研通信」ならびに「鯨類のストランディング（座礁・漂着・漂流・迷入）・定置網混獲—ストランディングした鯨について」（日本鯨類研究所, online）により確認することができる。また、相模湾や東京湾における鰭脚類の出現記録は、これらのデータベースの他に、「神奈川県沿岸産海棲哺乳類目録」（中村ほか, 1994）を中心とした文献、記事、目録などに散在している。

本論文では、相模湾とその奥に位置する東京湾で記録された鯨類の記録を集約した加登岡ほか（2020）、花上ほか（2021）、鷺見ほか（2022）に続き、同海域で記録された鰭脚類について、これまでの報告を集計するとともに、新たな情報も加えたりリストを作成し、同湾に出現する鰭脚類を調査する上での基礎資料とすることを目的とした。これにより、これまでに相模湾と東京湾で記録された主な海棲哺乳類に関する情報が集約される。

材料と方法

本論文では、相模湾と東京湾において、1879年5月

から2023年8月までに報告された鰭脚類の漂着・混獲・漂流・迷入・目視情報を集計した。情報源は、各データベースや既知報告（国立科学博物館, online; 日本鯨類研究所, online; King, 1961; 寺島, 1961; 東海区水産研究所, 1985; 中村・山口, 1987; 山本, 1990; 磯野, 1992; 鴨川シーワールド, 1992; 中村, 1993; 伊藤・中村, 1994; 中村ほか, 1994; 鴨川シーワールド, 1996; 日本鯨類研究所, 1997, 1998, 2002a, b; 中村, 2000; 荒井, 2004; 奥山, 2013; 崎山, 2013; 寺沢, 2013; 寺沢ほか, 2021）と、著者らが漁業関係者への聞き取りや現場で得た情報、およびメディア情報のうち、上記のデータベースに含まれないもの（未発表）とした（表1の出典, 備考を参照）。

相模湾、東京湾の定義は、周辺の地形などを考慮した区分である瀬能・松浦（2007）および佐藤（2017）に準じた。このため、対象水域は、静岡県（伊豆半島石廊崎以東）、神奈川県、東京都（東京23区に面する海域と伊豆大島以北）、および千葉県（南房総市野島崎以西）の沿岸と、両湾に流入する河川内とした（図1–5, 8–9）。

種の学名、和名は服部（2020）および Ohdachi *et al.*（2015）を基本とし、補足的に Jefferson *et al.*（2015）に従った。

各記録の定義、表記ルール

各記録の状況の定義と表記方法は、加登岡ほか（2020）、

花上ほか (2021)、鷺見ほか (2022) に従った。

各記録の定義は以下のとおりである。

- ・漂着：個体が海岸に流れ着いたもの。生体が座礁した場合を含む。
- ・混獲：主に定置網などの漁具に生体が入り込んだもの。
- ・漂流：死体が海上を漂っていたもの。
- ・迷入：生体が港湾、河川に迷い込んだもの。
- ・目視情報：生体が海上を遊泳している姿を目視で確認したもの。

記録の表記ルールは、以下のとおりである。

1. 表 1 の記録の分類は出典元に従った。
2. 初報告となる記録には事例番号に「※」を付した。
3. 住所の表記は出典元に従った。

各記録に記載されていた備考などの情報は省略したため、詳細については出典元を参照していただきたい。

## 結果

1879 年 5 月から 2023 年 8 月までの期間に、両湾をあわせて、計 37 例、2 科 8 属 8 種の鰭脚類の記録を確認した (表 1, 2)。記録の内訳は次のとおりである。

**相模湾**：計 31 例、2 科 7 属 7 種 (アゴヒゲアザラシ *Erignathus barbatus* : 1 例；クラカケアザラシ *Histiophoca fasciata* : 1 例；ゴマフアザラシ *Phoca largha* : 5 例；ワモンアザラシ *Pusa hispida* : 2 例；キタゾウアザラシ *Mirounga angustirostris* : 1 例；ニホンアシカ *Zalophus japonicus* : 1 例；キタオットセイ *Callorhinus ursinus* : 17 例；種不明アシカ科 : 3 例)。

**東京湾**：計 6 例、2 科 5 属 5 種 (アゴヒゲアザラシ : 1 例；ゴマフアザラシ : 1 例；ニホンアシカ : 1 例；トド *Eumetopias jubatus* : 1 例；キタオットセイ : 2 例)。

対象水域においてセイウチ科の記録はなかった。

**記録時期**：アザラシ科は 5 月から 12 月に、アシカ科はほぼ周年記録され、特に冬季に多かった (表 3, 図 6)。

**発見された場所**：記録された場所がおおむね特定できた 36 例を図 1-5、8-9 に示した (場所の特定ができなかった記録は表 1 の住所に▲を付した)。

**発見時の生死**：記録のある 30 例中、生存 : 死亡 = 26 : 4 で、86.7% が生存していた (表 1, 図 8, 9)。

**状況**：アザラシ科とアシカ科あわせて、漂着 16 例 (43.2%)、混獲 5 例 (13.5%)、迷入 10 例 (27.0%)、目視情報 3 例 (8.1%)、不明 3 例 (8.1%) であった (表 4, 図 7)。漂流の記録は確認されなかった。

**個体数**：記録のある 37 例中、親子で漂着した 1 例 (事例番号 12) 以外はすべて単独 (97.3%) であった (表 1)。

**体長**：記録のある 13 例中、アザラシ科はおおむね若齢サイズと考えられ、記録の多かったキタオットセイは若齢から成体サイズまで記録があった (表 1)。

**性別**：記録のある 15 例中、全体の性比は、オス : メス = 2 :

3 だが、アザラシ科 (5 例) はオス : メス = 4 : 1、アシカ科 (10 例) はオス : メス = 1 : 4 であった (表 1)。

本論文で記録が確認された種の概要を以下に示す。なお、対象水域外における各種の記録については国立科学博物館 (online) を中心に確認した。

## 各種の記載

### アゴヒゲアザラシ

#### *Erignathus barbatus* (Erxleben, 1777)

(図 1 ; 表 1-4)

本種は国際自然保護連合 (International Union for Conservation of Nature and Natural Resources, 以下 IUCN と記す) による「IUCN 絶滅危惧種レッドリスト (The IUCN Red List of Threatened Species)」(以下、レッドリストと記す) では低危惧種 (Least Concern) に選定されている (IUCN, 2022)。北極および亜北極地域全体にまばらに分布する。北太平洋ではオホーツク海まで回遊するが、北海道沿岸では稀である (Kobayashi, 2015)。新生子の体長は約 1.3 m、成体の体長は 2.1-2.5 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて 30 例が報告されており、本研究対象水域以南の太平洋側では愛知県、徳島県 (以上、各 3 例)、和歌山県 (2 例)、静岡県、三重県、大分県 (以上、各 1 例) から記録がある (国立科学博物館, online; 蛭田・濱野, 2001)。また、上記データベースにない情報として、高知県 (1 例) でも記録が残っている (金城・谷地森, 2022)。

本種の記録は相模湾、東京湾で 1 例ずつあり、それぞれ 7、8 月の記録であった。2002 年 8 月に東京湾に流れ込む多摩川で目撃された個体 (事例番号 32) は「タマちゃん」の愛称で呼ばれ、近隣の鶴見川、帷子川、大岡川 (神奈川県) や荒川 (埼玉県) でも目撃されたが、その後消息不明となった (国立科学博物館, online; 荒井, 2004)。

### クラカケアザラシ

#### *Histiophoca fasciata* (Zimmermann, 1783)

(図 1 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、低危惧種 (Least Concern) に選定されている (IUCN, 2022)。北太平洋の固有種であり、主にオホーツク海、ベーリング海、チュクチ海に分布するが (Kobayashi, 2015)、本州以南にも迷入することがあるとされる (服部, 2020)。新生子の体長は約 86 cm、成体の体長は最大 1.8 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて 75 例報告されているが、事例番号 2 の記録が日本周辺海域における南限記録と考えられる。

本種の記録は相模湾で 1 例、記録時期は 6 月であった。

表1. 相模湾・東京湾における鯨脚類（アザラシ科、アシカ科）の全記録（出典と注釈は表の末尾を参照のこと）

事例番号	年/月/日	場所	生死	状況	個体数	体長 (m)	体重 (kg)	性別	出典, 備考
相模湾									
アゴヒゲアザラシ <i>Erignathus barbatus</i>									
1	1986/7/27	千葉県 富津市竹岡	-	漂着	1	-	-	-	19, 24
クラカケアザラシ <i>Histiophoca fasciata</i>									
2	2012/6/17	神奈川県 平塚市須賀湘南海岸	生存→飼育→死亡	漂着	1	約1	30	オス	1, 20, 24, 25
ゴマフアザラシ <i>Phoca largha</i>									
3	1986/6/24	神奈川県 足柄下郡真鶴町 真鶴岬番場浦	死亡	混獲 (定置網)	1	1.015	31	オス	6, 12
4	1997/5/15	神奈川県 茅ヶ崎市茅ヶ崎漁港	生存→飼育	港内迷入	1	-	-	オス	1, 14, 16, 24, 25
5	8/26/2009	神奈川県 三浦郡葉山町	生存	港内迷入	1	-	-	-	1, 24
6	2013/7/15	神奈川県 中郡二宮町山西	生存	漂着 (目視情報)	1	-	-	-	1, 24
7	2013/8/11	神奈川県 小田原市酒匂川河口	生存	漂着	1	0.9	-	-	1, 21, 24
ワモンアザラシ <i>Pusa hispida</i>									
8	1989/7/29	千葉県 館山市相浜	-	漂着	1	-	-	-	19, 24
9	1989/12/29	静岡県 伊東市川奈	生存→飼育	混獲 (定置網)	1	0.64	7.4	メス	1, 7, 24
キタゾウアザラシ <i>Mirounga angustirostris</i>									
10	2001/10/26	千葉県 館山市波左間	生存	湾内迷入	1	-	-	-	1, 17, 19, 24
ニホンアシカ <i>Zalophus japonicus</i>									
11	1879/5	神奈川県 三浦市南下浦町松輪	-	混獲 (地引網)	1	約1.26	-	メス	8, 10, 12
キタオットセイ <i>Callorhinus ursinus</i>									
12 ※	1955/7/11	静岡県 熱海市初島	生存→飼育	漂着	2	-	-	メス1, 不明1	熱海新聞 (1955/7/12)
13 ※	1964/2/25	静岡県 熱海市下多賀	生存→死亡	漂着	1	-	約40	-	熱海新聞 (1964/2/26, 1964/3/3) 熱海新聞 (1970/7/22)
14 ※	1970/7/21 頃	静岡県 熱海市網代	生存	漂着	1	-	-	-	5, 6
15	1985/2/22	静岡県 伊豆東岸 (伊豆山沖)	-	不明	-	-	-	-	1, 9, 16, 24
16	1986/11/27	千葉県 館山市砂浜	死亡	漂着	1	1.35	-	メス	19, 24
17	1989/5/17	千葉県 館山市那古	-	漂着	1	-	-	-	1, 12, 16, 24, 25
18	1994/2/27	神奈川県 藤沢市江の島海岸	生存→飼育→死亡	迷入	1	1.33	-	メス	1, 13, 19, 24
19	1996/2/22	千葉県 館山市相浜漁港	生存→飼育→放流	港内迷入	1	-	-	オス	1, 2, 15, 24
20	1998/3/20	神奈川県 藤沢市江の島片瀬西浜海岸	死亡	漂着	1	2	-	-	1, 24
21	2005/3/9	神奈川県 横須賀市久里浜沖 浦賀水道付近	生存	目視情報	1	-	-	-	-
22	2006/2/21	神奈川県 横須賀市秋谷 久留和海岸	生存	漂着	1	-	-	-	1, 2, 24

表 1. つづき

事例番号	年/月/日	場所	生死	状況	個体数	体長 (m)	体重 (kg)	性別	出典, 備考
23	2012/1/27	神奈川県 鎌倉市腰越漁港沖	生存	目視情報	1	-	-	-	1, 24
24	2013/2/22	神奈川県 足柄下郡真鶴町 真鶴三ツ石沖	生存	目視情報 (湾内迷入)	1	-	-	-	1, 23, 24
25	2013/3/8	神奈川県 小田原市	生存→飼育→放流	漂着	1	0.65	7	メス	1, 22, 23, 24, 25
26	2018/2/14	国府津インター地先	生存→放流	混獲 (定置網)	1	-	-	-	1, 24
27	2022/3/16	千葉県 館山市香	死亡	混獲 (定置網)	1	-	-	-	1
28	2022/12/27	静岡県 下田市爪木崎	生存	迷入	1	1.3	-	-	伊豆新聞デジタル (2022/12/28)
種不明アシカ科 Otariidae indet. gen. & sp.									
29	1961/3/19	神奈川県 三浦市長沢 - 津久井海岸	-	不明	-	-	-	-	4, 12
30 ※	1966/3/7	静岡県 熱海市下多賀長浜海岸	生存	漂着	1	-	-	-	熱海新聞 (1966/3/8)
31 ※	1968/1/30	静岡県 熱海市下多賀長浜海岸	生存	漂着	1	-	-	メス	熱海新聞 (1968/2/1)
東京湾									
アゴヒゲアザラシ <i>Erignathus barbatus</i>									
32	2002/8/7	東京都 大田区田園調布本町 多摩川丸子橋付近	生存	河川迷入	1	-	-	オス	1, 18, 19, 24
ゴマフアザラシ <i>Phoca largha</i>									
33	2011/10/9	埼玉県 志木市荒川秋ヶ瀬取水堰	生存	河川迷入	1	-	-	-	1
ニホンアシカ <i>Zalophus japonicus</i>									
34	1884/4/15	神奈川県 横浜市▲	-	不明	-	-	-	-	3, 6, 11, 12, 16
トド <i>Eumetopias jubatus</i>									
35	2023/1/15	東京都 羽田空港周辺	生存	迷入	1	1.5-2 (報道)	-	-	朝日新聞 (2023/1/17)
キタオットセイ <i>Callorhinus ursinus</i>									
36 ※	1981/5/28	千葉県 船橋市潮見町京葉港	生存→飼育	漂着 (港内迷入)	1	約 1.5	55	メス	朝日新聞 (1981/5/29)
37	2006/9/9	埼玉県 川越市末広町新河岸川	生存→飼育→放流	河川迷入	1	1	23	オス	1

出典：1. 国立科学博物館 (online); 2. 日本鯨類研究所 (online); 3. King (1961); 4. 寺島 (1961); 5. 東海区水産研究所 (1985); 6. 中村・山口 (1987); 7. 山本 (1990); 8. 磯野 (1992); 9. 鴨川シーワールド (1992); 10. 中村 (1993); 11. 伊藤・中村 (1994); 12. 中村ほか (1994); 13. 鴨川シーワールド (1996); 14. 日本鯨類研究所 (1997); 15. 日本鯨類研究所 (1998); 16. 中村 (2000); 17. 日本鯨類研究所 (2002a); 18. 日本鯨類研究所 (2002b); 19. 荒井 (2004); 20. 奥山 (2013); 21. 崎山 (2013); 22. 寺沢 (2013); 23. 寺沢ほか (2021); 24. 石川 (未発表); 25. 新江ノ島水族館 (未発表)

▲：場所が特定できず、図 1-5 に記せなかった記録；※：初報告

**ゴマフアザラシ**  
***Phoca largha Pallas, 1811***

(図 1, 2 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、低危惧種 (Least Concern) に選定されている (IUCN, 2022)。北太平洋の固有種で、チュクチ海、ベーリング海、オホーツク海、黄海、日本海周辺に分布する (Kobayashi, 2015)。日本周辺で見られるアザラシ科の中では最も低緯度まで分布している (Ohdachi *et al.*, 2015)。新生子の体長は 77-92 cm、成体の体長はオス 1.61-1.70 m、メス 1.51-1.60 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて 335 例が報告されており、本研究対象水域以南の太平洋側では鹿児島県 (3 例)、三重県 (2 例)、静岡県、愛知県、岐阜県、高知県、宮崎県、沖縄県 (東シナ海側) (以上、各 1 例) で記録があった (Naito, 1976; 国立科学博物館, online; 蛭田・濱野, 2001)。

本種の記録は相模湾で 5 例、東京湾で 1 例あった。記録時期は 5-7、10 月が 1 例ずつ、8 月が 2 例であった。

**ワモンアザラシ**  
***Pusa hispida (Schreber, 1775)***

(図 3 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、低危惧種 (Least Concern) に選定されている (IUCN, 2022)。北極圏の沿岸で定着氷の開水域があるところで見られる (Kobayashi, 2015)。新生子の体長は 60-65 cm、成体の体長は 1.10-1.65 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて 74 例が報告されており、本研究対象水域以南の太平洋側では愛知県、三重県、徳島県 (各 1 例) で記録があった。

本種の記録は、相模湾にのみ 2 例が確認された。記録時期は 7 月と 12 月に 1 例ずつであった。

**キタゾウアザラシ**  
***Mirounga angustirostris (Gill, 1866)***

(図 3 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、低危惧種 (Least Concern) に選定されている (IUCN, 2022)。北太平洋の東部と中部に分布し、年に 2 回、繁殖と換毛のために回遊する (Jefferson *et al.*, 2015)。回遊の際に一部の個体はアリューシャン列島まで来遊して、稀に日本沿岸にまで迷入することがある (Jefferson *et al.*, 2015)。新生子の体長は 1.2 cm、成体の体長はオス 4.2 m、メス 2.7 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。これまで国内では、本論文対象水域以外に、東京都新島村前浜海岸、山形県鶴岡市三瀬で 1 例ずつ生体の記録があった (国立科学博物館, online)。

本種の記録は相模湾で 1 例のみであり、記録時期は 10 月であった。

**ニホンアシカ**  
***Zalophus japonicus (Peter, 1866)***

(図 4 ; 表 1-4)

本種は、カリフォルニアアシカ属のガラパゴスアシカ *Z. wolfebaeki* とともにカリフォルニアアシカ *Z. californianus* の亜種として記載されていたが (Jefferson *et al.*, 1999)、近年は独立種として扱われている (Committee on Taxonomy, 2022)。4 か月齢の幼体の体長は 65 cm、成体の体長はオス 2.5 m、メス 1.4 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。IUCN によるレッドリストでは、絶滅種 (Extinct) として扱われている (IUCN, 2022)。一方、国内では最後の目撃から 50 年が経過していないことから、絶滅を認めず、環境省レッドリスト 2020 では絶滅危惧種 IA 類 (Critically Endangered) に位置づけられている (環境省, 2020)。日本周辺海域全体では 1975 年の竹島での記録を最後に生息情報がなく、50 年後にあたる 2025 年に絶滅宣言がされると考えられている (磯野, 2016)。本種は、過去には本州・四国・九州を含む日本全域に分布し、本州沿岸で繁殖する唯一の鰭脚類であった (服部, 2020)。

相模湾、東京湾には、神奈川県横須賀市久里浜沖の海獺島をはじめとして、静岡県伊東市、神奈川県葉山町および三浦市、伊豆大島周辺にアシカ島、トド島という地名が残っており、本種が各地に生息していたことが伺える (中村, 2000)。中村 (1993) によると、ニホンアシカは 1897 年代までは、銚子以南の房総半島から東京湾、相模湾沿岸、相模灘から伊豆諸島南部にかけても生息していたが、それ以降急速に個体数が減少し、1907 年頃までには房総半島沿岸、東京湾、相模湾沿岸からほとんど絶滅したとされる。また、寺島 (1961) は同年の記録としてニホンアシカの出現を報告しているが、中村 (1993) により推測された当該海域での絶滅時期を踏まえると、この記録が本種であったことを支持する証拠は不十分であるとされている (中村ほか, 1994)。このため、本論文では寺島 (1961) による報告は、種不明アシカ科として扱った。

前述の通り、本種は東京湾、相模湾沿岸に 1897 年頃までは生息していたとされるが、国内のデータベース、論文、報告書に確認年月日や詳細な地点が示された記録はないため、本論文では、1870-1880 年代の捕獲事例 2 例 (King, 1961; 磯野, 1992) を記録として扱った。

**トド**  
***Eumetopias jubatus (Schreber, 1776)***

(図 4 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、近危急種 (Near Threatened) に選定されている (IUCN, 2022)。環境省レ

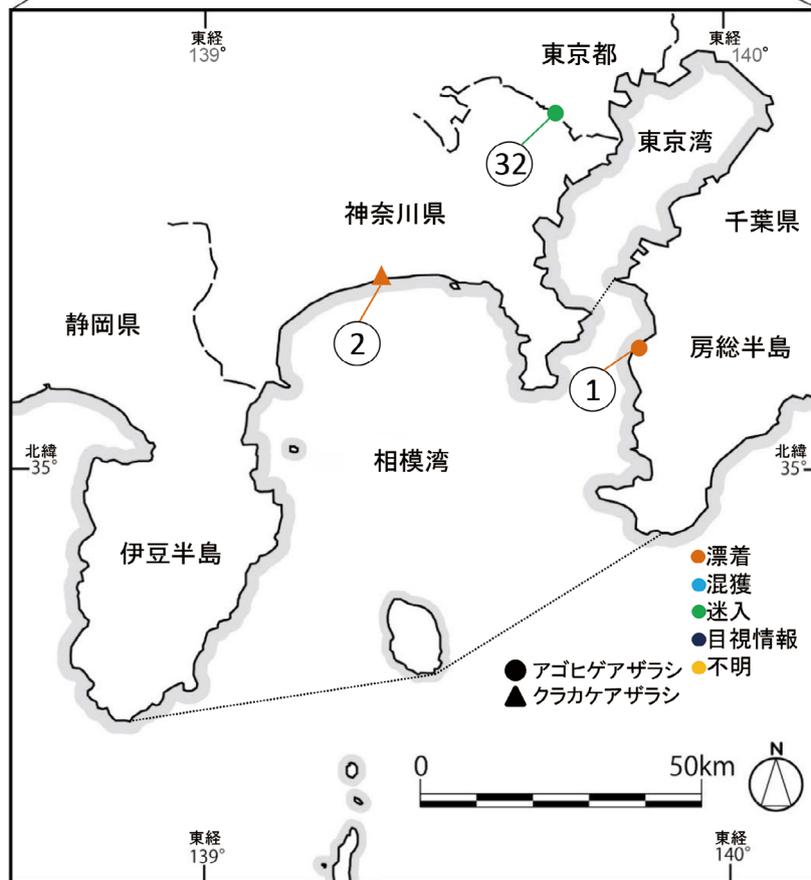
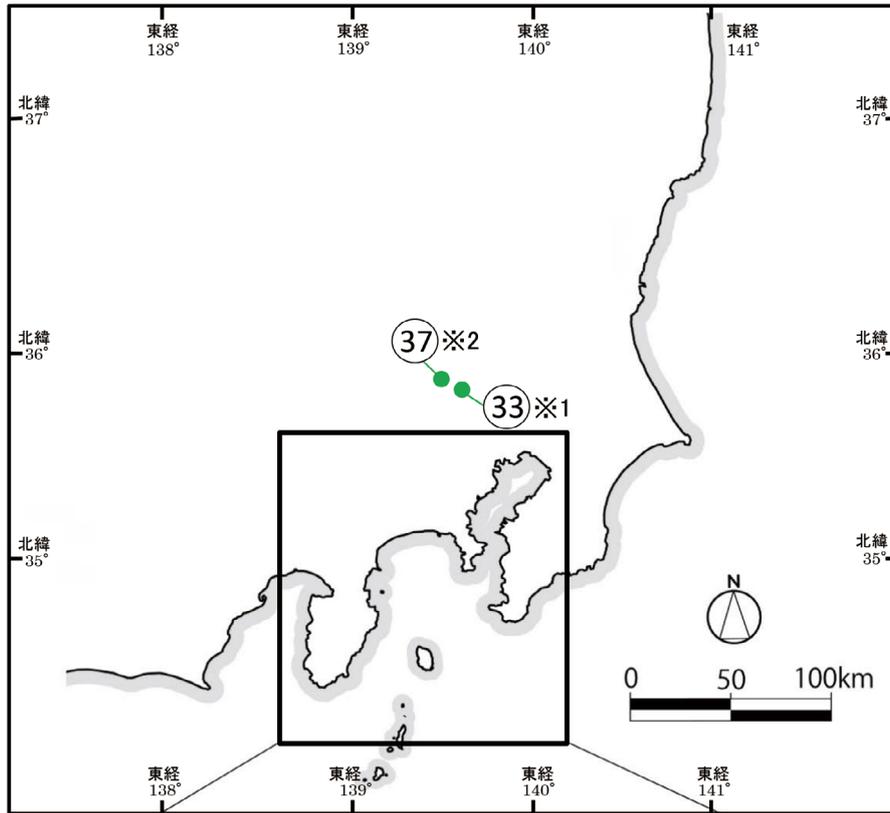


図1. 相模湾・東京湾におけるアゴヒゲアザラシとクラカケアザラシの記録位置(番号は表1の事例番号に対応する)。

※1 事例番号33はゴマフアザラシの記録位置。

※2 事例番号37はキタオットセイの記録位置。

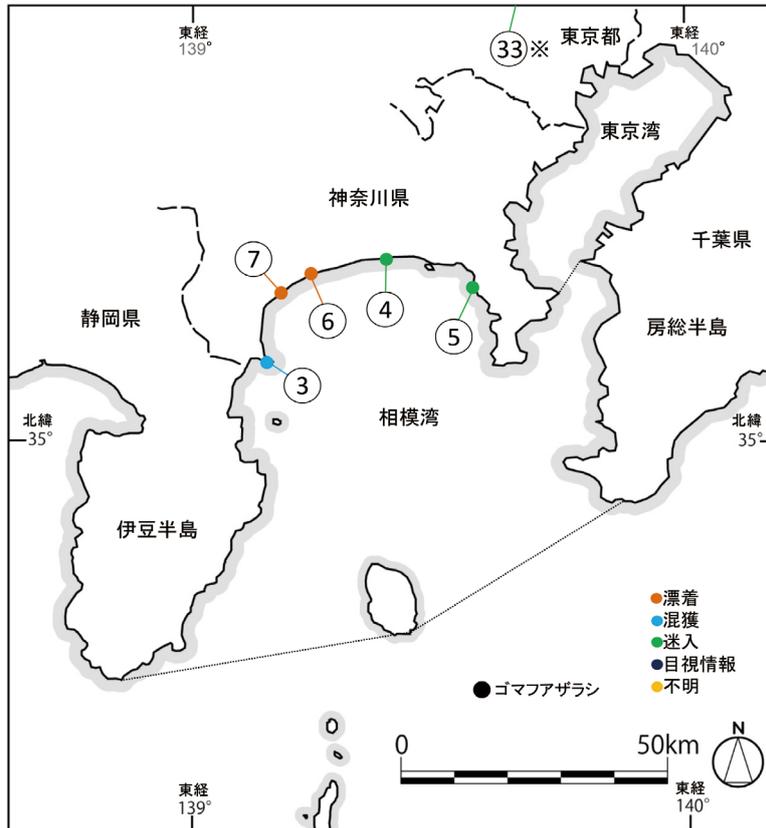


図2. 相模湾・東京湾におけるゴマファザシの記録位置(番号は表1の事例番号に対応する)。

※事例番号33の記録位置は地図外のため、図1上図に記載した。

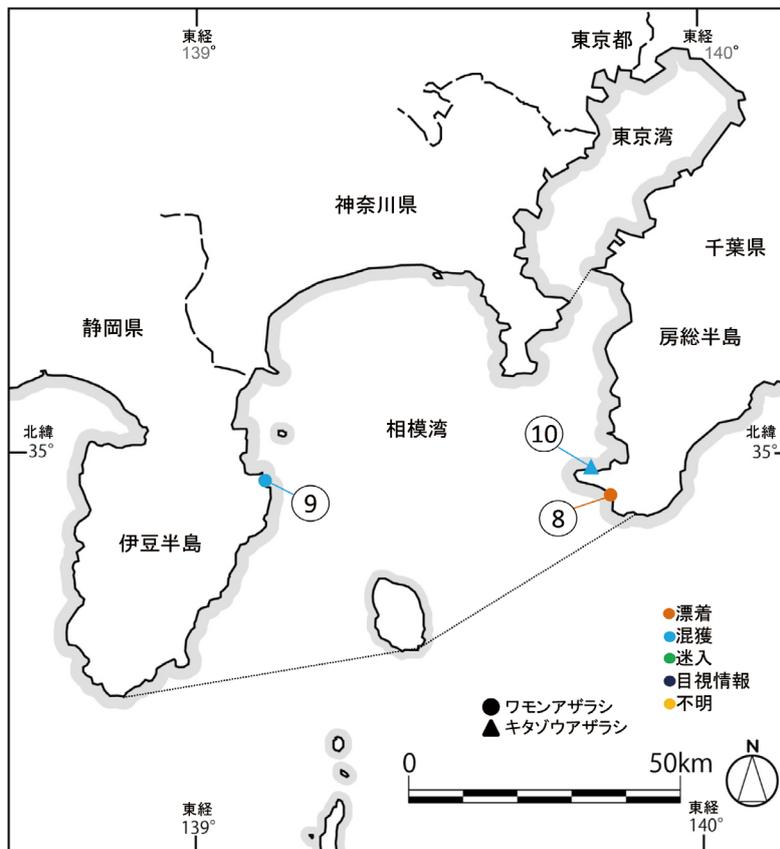


図3. 相模湾・東京湾におけるワモンアザシとキタゾウアザシの記録位置(番号は表1の事例番号に対応する)。

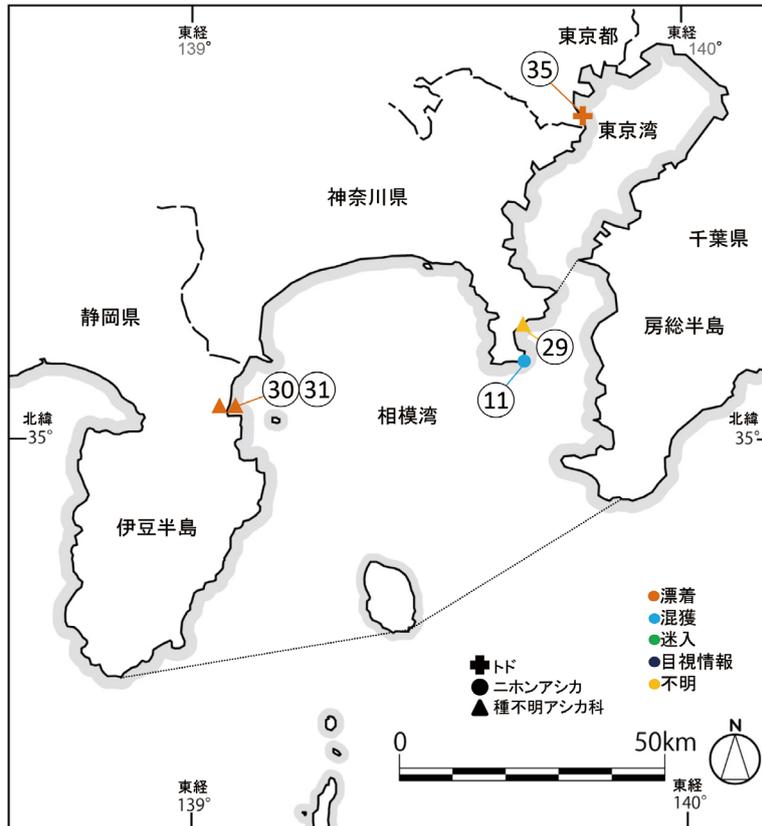


図4. 相模湾・東京湾におけるニホンアシカ、トド、種不明アシカ科の記録位置（番号は表1の事例番号に対応する）。

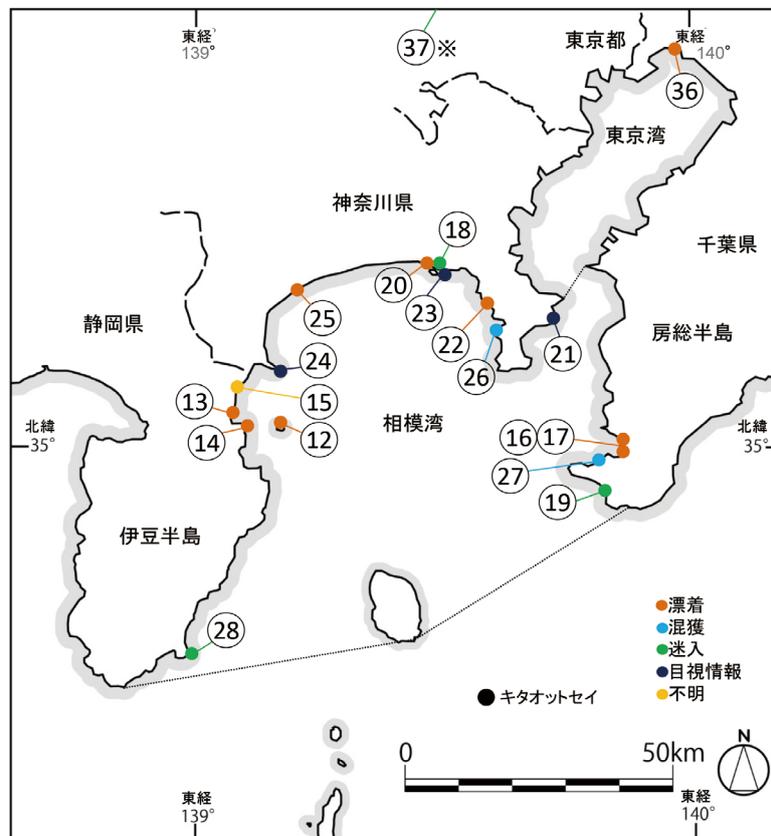


図5. 相模湾・東京湾におけるキタオットセイの記録位置（番号は表1の事例番号に対応する）。

※事例番号37の記録位置は地図外のため、図1上図に記載した。

レッドリスト 2020 では準絶滅危惧 (Near Threatened) に位置づけられている (環境省, 2020)。本種は、日本北部から南カリフォルニアにかけての太平洋に見られる (Ishinazaka, 2015)。5-7 月の繁殖期にはオホーツク海周辺の特定の島や岩礁に集結し、ルッカリーとして利用する (服部, 2020)。秋から冬にかけては北海道周辺に來遊し、青森県下北半島周辺でも見られる (Ishinazaka, 2015)。新生子の体長は 1 m、成体の体長はオス 3.3 m、メス 2.5 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。1959 年以降、北海道および青森県における日本海の沿岸、又は沖合水域に來遊する個体について深刻な漁業被害を背景に上限数を設定して採捕を行っている (磯野・服部, 2022)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて 72 例が報告されており、本研究対象水域以南の太平洋側では三重県 (国立科学博物館, online) で 1 例記録があり、その他、高知県 (金城・谷地森, 2022) でも 1 例記録があった。

本種の記録は東京湾で 1 例のみで、記録時期は 1 月であった。このほかに情報が両湾で 1 例ずつあった。東京湾では、朝日新聞 (1966 年 6 月 28 日版) に東京湾、隅田川、荒川に出現したトドについて記事が掲載されているが、これは築地の商店から逃げ出したものであることが記事の冒頭に書かれており、北方からの漂着個体ではない。相模湾では、忍田 (1980) に熱海市網代港沖合の定置網に入ったというトドの情報が記載されている。記載の状況から信憑性は高いと考えられ、中村ほか (1994) では、忍田 (1980) の情報に基づき、神奈川県との隣接県である静岡県でのトドの記録として扱っているが、出現時の日付の記載がなく、また新聞等での裏付けが取れなかったため、本論文ではこれらの情報をトドの記録から除外した。

### キタオットセイ

#### *Callorhinus ursinus* (Linnaeus, 1758)

(図 1, 5 ; 表 1-4)

IUCN によるレッドリストでは、危急種 (Vulnerable) に選定されている (IUCN, 2022)。北太平洋、ベーリング海、オホーツク海、日本海に広く分布する (Hattori, 2015)。6-8 月の夏季はオホーツク海やベーリング海などの繁殖場となる島へ集結し、それ以外の期間は索餌回遊する。繁殖期以外は上陸することはほとんどなく、外洋で見られ、一部は房総半島から三陸沖でも見られる (服部, 2020)。新生子の体長は 60-65 cm、成体の体長はオス 2.1 m、メス 1.5 m とされる (Jefferson *et al.*, 2015)。本種に関する記録は、国立科学博物館 (online) のデータベースにおいて「オットセイ」として 179 例が報告されており、本研究対象水域以南の太平洋側では、三重県 (7 例)、静岡県、愛知県 (以上、各 2 例)、和歌山県、大阪府 (瀬戸内海)、高知県 (以上、各 1 例) で記録があった (国立科学博物館, online; 金城・谷地森, 2022)。

本種の記録は相模湾で 17 例、東京湾で 2 例あった。記録時期は 2 月が 7 例と最も多く、次いで 3 月に 4 例、5、7 月に 2 例、1、9、11、12 月に 1 例ずつあった。

### 考察

1879 年 5 月から 2023 年 8 月までに、鰭脚類の記録は、相模湾で 31 例、東京湾で 6 例の計 37 例が確認され、記録された種は両湾をあわせて 2 科 8 属 8 種であった (表 1)。特に、キタオットセイ (19 例) とゴマフアザラシ (6 例) の記録が多く確認されたが (表 2)、これは 2 種が日本周辺に生息する鰭脚類の中でも比較的 low 緯度まで分布する種であること (Ohdachi *et al.*, 2015) に起因すると考えられる。鰭脚類は、世界にアザラシ科が 14 属 19 種、アシカ科が 7 属 15 種、セイウチ科が 1 属 1 種の計 35 種が知られており、そのうち日本近海には、アザラシ科 5 種、アシカ科 3 種の計 8 種が生息するとされる (服部, 2020)。相模湾、東京湾あわせて日本近海に生息する鰭脚類のうちのゼニガタアザラシ *Phoca vitulina* をのぞく 7 種 (87.5 %) が確認され、北太平洋の東部と中部に分布するキタゾウアザラシの迷入を含めると 8 種となった。なお、これらの数字にはニホンアシカも含む。セイウチはこれまでに国内で、北海道函館市で 2 例、三重県尾鷲市で 1 例が記録されているが (国立科学博物館, online)、本論文の対象水域での記録はなかった。

**記録時期:** アザラシ科とアシカ科の記録時期には違いが認められた。アザラシ科は、1-4 月の記録はなく 5 月以降の夏季を中心に記録があった。漂着個体の体長から、3-5 月の繁殖期 (服部, 2020) の後に群れからはぐれた若齢個体が南下してきている例が多いものと考えられた。一方、アシカ科のニホンアシカは、過去には 1 年を通してみられていたようである (中村, 2000)。キタオットセイはほぼ 1 年を通して記録があったが、特に冬季 (2-3 月) に多かった。これは、本種が冬季に南下回遊を行う際に (三谷, 2020)、一部の個体が相模湾や東京湾まで到達したのと考えられる (表 1, 3, 図 6)。

**発見された場所:** 湾内の一定の地域に集中するといった傾向はみられなかった (図 1-5, 8, 9)。

**発見時の生死:** 鰭脚類の発見時の生体の割合は、鯨類のヒゲクジラ亜目の 44.8 % (加登岡ほか, 2020)、ハクジラ亜目の 56.4 % (花上ほか, 2021; 鷺見ほか, 2022) に比べると、アザラシ科が 90.0 %、アシカ科が 85.0 % であり、両科を合わせても 86.7 % と高い割合を示した。

**状況:** アザラシ科とアシカ科をあわせて、漂着が 16 例 (43.2 %) と最も多く、次いで迷入が 10 例 (27.0 %) であった (表 1, 4, 図 7)。相模湾、東京湾で記録されたヒゲクジラ亜目では、発生状況の傾向が大きく異なり、最も多かったのは混獲の 66.7 % であり、漂着は 19.9 % にとどまる (加登岡ほか, 2020)。一方、ハクジラ亜目では、鰭脚類と同様に漂着が全体の 58.9 % と最も多く、次いで迷入が 14.0 % であった (花上ほか, 2021; 鷺見ほか, 2022)。

月別の記録数

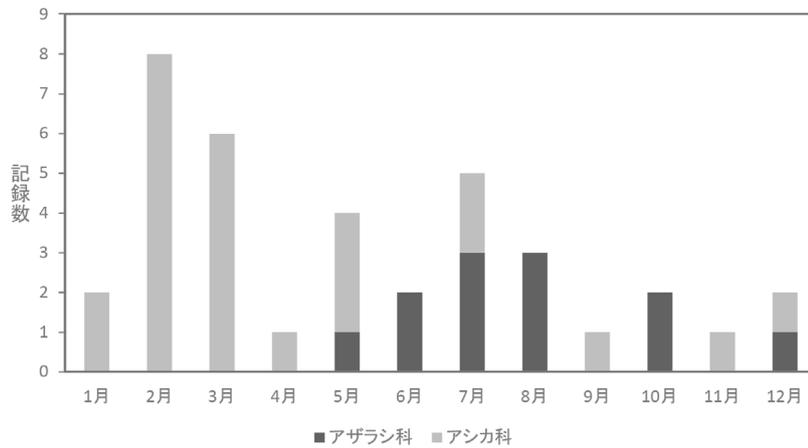


図 6. 相模湾・東京湾における鰭脚類（アザラシ科, アシカ科）の月別の記録数.

表 2. 相模湾・東京湾における鰭脚類（アザラシ科, アシカ科）の記録数

和名	学名	相模湾	東京湾	計
アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>	1	1	2
クラカケアザラシ	<i>Histriophoca fasciata</i>	1	-	1
ゴマフアザラシ	<i>Phoca largha</i>	5	1	6
ワモンアザラシ	<i>Pusa hispida</i>	2	-	2
キタゾウアザラシ	<i>Mirounga angustirostris</i>	1	-	1
ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	1	1	2
トド	<i>Eumetopias jubatus</i>	-	1	1
キタオットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>	17	2	19
種不明アシカ科	Otariidae indet. gen. & sp.	3	-	3
計		31	6	37

表 3. 相模湾・東京湾における鰭脚類（アザラシ科, アシカ科）の月別の記録数

和名	学名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
クラカケアザラシ	<i>Histriophoca fasciata</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
ゴマフアザラシ	<i>Phoca largha</i>	-	-	-	-	1	1	1	2	-	1	-	-	6
ワモンアザラシ	<i>Pusa hispida</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2
キタゾウアザラシ	<i>Mirounga angustirostris</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2
トド	<i>Eumetopias jubatus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
キタオットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>	1	7	4	-	2	-	2	-	1	-	1	1	19
種不明アシカ科	Otariidae indet. gen. & sp.	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
計		2	8	6	1	4	2	5	3	1	2	1	2	37

表 4. 相模湾・東京湾における鰭脚類（アザラシ科, アシカ科）の発見時の状況

和名	学名	漂着	混獲	漂流	迷入	目視情報	不明	計
アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>	1	-	-	1	-	-	2
クラカケアザラシ	<i>Histriophoca fasciata</i>	1	-	-	-	-	-	1
ゴマフアザラシ	<i>Phoca largha</i>	2	1	-	3	-	-	6
ワモンアザラシ	<i>Pusa hispida</i>	1	1	-	-	-	-	2
キタゾウアザラシ	<i>Mirounga angustirostris</i>	-	-	-	1	-	-	1
ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	-	1	-	-	-	1	2
トド	<i>Eumetopias jubatus</i>	-	-	-	1	-	-	1
キタオットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>	9	2	-	4	3	1	19
種不明アシカ科	Otariidae indet. gen. & sp.	2	-	-	-	-	1	3
計		16	5	0	10	3	3	37

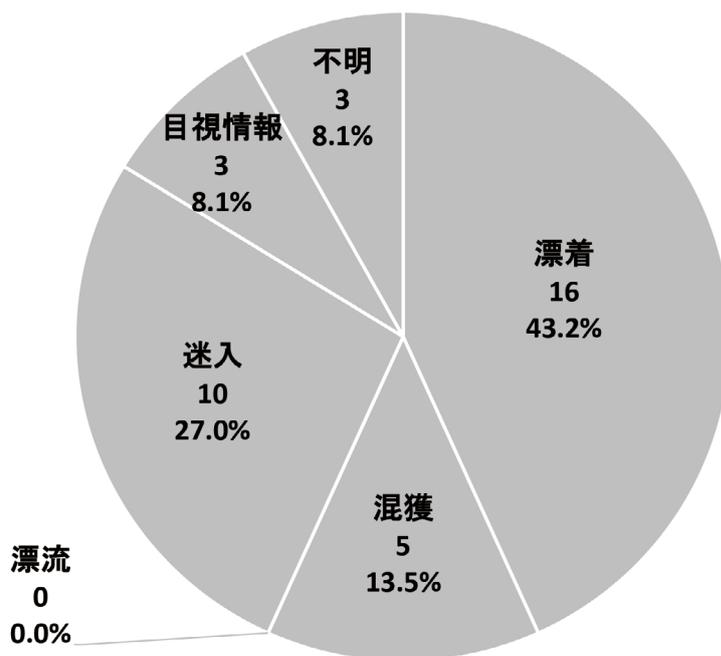


図7. 相模湾・東京湾における鰭脚類（アザラシ科，アシカ科）のストランディング発生時の状況の内訳.

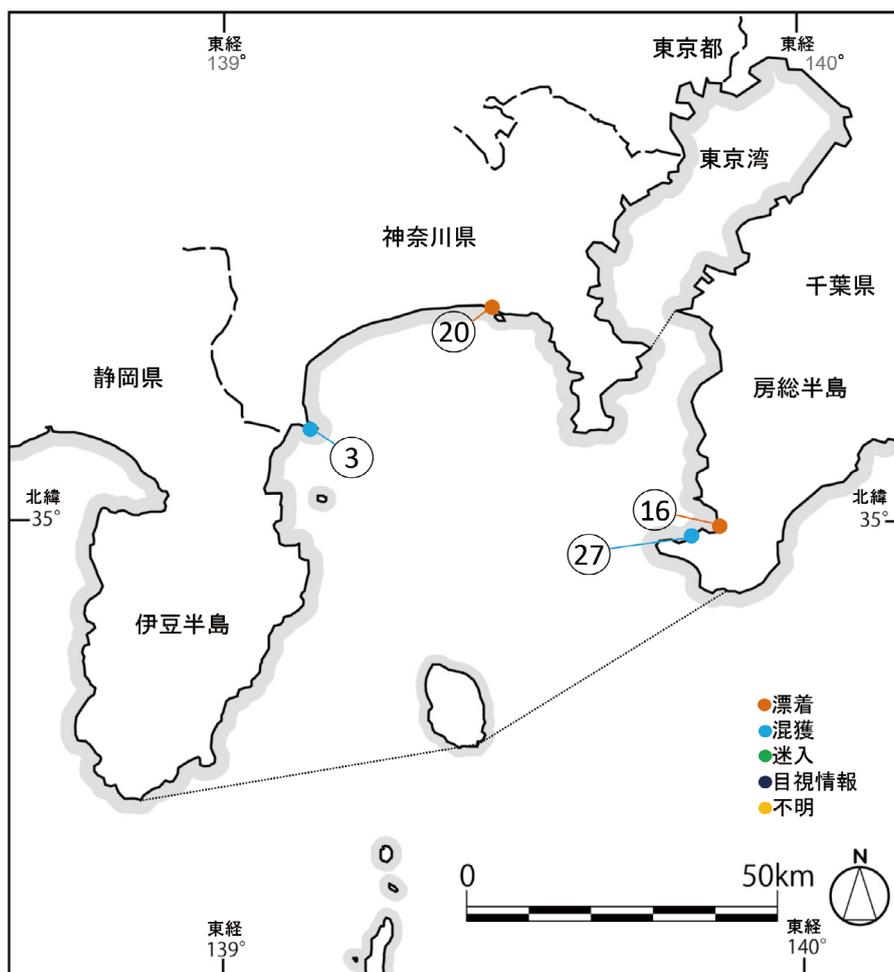


図8. 死亡した状態で発見された鰭脚類（アザラシ科，アシカ科）の記録位置（番号は表1の事例番号に対応する）.

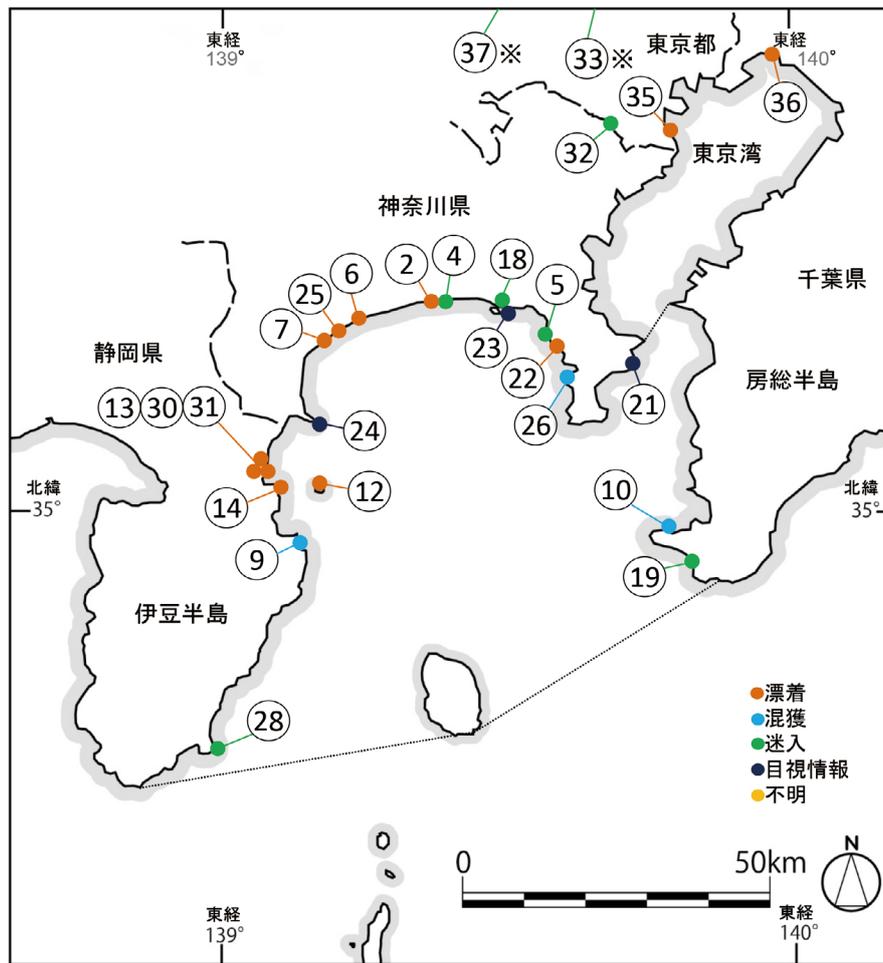


図9. 生存した状態で発見された鰭脚類（アザラシ科，アシカ科）の記録位置（番号は表1の事例番号に対応する）。

※事例番号33と37の記録位置は地図外のため、図1上図に記載した。

**体長：**アザラシ科については、当歳を含めて若齢と考えられる体長の個体が多く（表1）、前述の通り繁殖期後に若齢個体が南下してきているものと考えられた。キタオットセイについては小型の若齢個体から成体まで幅広く記録があり、低緯度まで分布する（服部，2020）影響と考えられた。

**性別：**アザラシ科とアシカ科では、性に異なる傾向が見られたが、これらの要因の推定には至らなかった。鰭脚類の記録数が少ない当水域では、発見時には性別をはじめとしたより詳細な情報を収集したい。

日本近海に分布するものの本論文では記録のなかったゼニガタアザラシについての知見、情報を今後のために追記する。

ゼニガタアザラシ *Phoca vitulina* Linnaeus, 1758 は、IUCNによるレッドリストでは、低危惧種（Least Concern）に（IUCN, 2022）、国内の環境省レッドリスト2020では準絶滅危惧（Near Threatened）に位置づけられている（環境省，2020）。本種は北太平洋および北大西洋の北緯28度から北緯62度にかけて分布し、鰭脚類の中で最も広い分布域を持つ（Kobayashi, 2015）。日本近海で見られる鰭脚類のうち、近年記録のないニホンアシカを

除いて唯一国内で繁殖する種で、定住性が強く、他の4種と異なり岩礁上で出産する（服部，2020；小林，2020）。新生子の体長は61–102 cm、成体の体長はオス1.9 m、メス1.7 mとされる（Jefferson *et al.*, 2015）。本種に関する記録は、国立科学博物館（online）のデータベースにおいて42例が報告されているが、本州以南での記録は岩手県で1例あるのみとなっている。

鰭脚類出現時の課題として、個体の識別があげられる。過去には、同一個体が長期に渡って滞在した記録や（事例番号5, 30；国立科学博物館，online）、他海域から移動してきた記録（事例番号4；崎山，2013）が残っていることから、一定期間に同一個体を重複してカウントしてしまうことが示唆された。鰭脚類の個体識別には体色や体表の模様などが有用と考えられるため、発見時にはこれらの特徴も併せて記録に残すことが肝要であろう。

これまで全国の鰭脚類の記録は、国立科学博物館、日本鯨類研究所等により蓄積されてきた。それらのデータや既存の報告を有効活用することで、各生物の分布域、地域ごとの生物相の特徴を知ることができる。また経年的にみると生物相や地域環境の変化も見えてくる可能性がある。本論文では、相模湾と東京湾における鯨類の記

録をまとめた加登岡ほか (2020)、花上ほか (2021)、鷲見ほか (2022) に続き、鰭脚類の記録を集計した。これらにより、これまでに同湾で記録された海棲哺乳類が明らかになった。今後の同湾内の動物調査の基礎資料として活用されることが期待される。

## 謝辞

ストランディングデータを提供していただいた一般財団法人日本鯨類研究所、鴨川シーワールド館長 勝俣 浩氏、下田海中公園水族館 藤原克則氏、都築信隆氏、神奈川県水産技術センター 岡部 久氏、三浦半島自然保護の会 鈴木茂也氏、熱海市立図書館 小林啓一氏、奥津悠佳里氏並びに職員の皆様、下田市立図書館、沼津市立図書館、神奈川ストランディングネットワーク、報告の機会を与えていただいた新江ノ島水族館 堀 一久氏をはじめ展示飼育部の諸氏に感謝の意を表す。また原稿改訂に有益な助言を与えていただいた査読者と編集委員会の皆様に対して心より御礼申し上げる。

## 引用文献

- 荒井一利, 2004. 迷子になったアザラシたち: 南房総で確認されたアシカ・アザラシ類. さかまた, (63): 2-3.
- Committee on Taxonomy, 2022. List of marine mammal species and subspecies. Society for Marine Mammalogy, www.marinemammalscience.org. (accessed on 2023- October-1)
- 藤田敏彦・並河 洋, 2007. 豊かな動物相を支える相模湾: 生物海洋学的な特性. 国立科学博物館編, 相模湾動物誌, pp. 3-6. 東京大学出版会, 東京.
- 花上諒大・崎山直夫・加登岡大希・鈴木 聡・石川 創・山田 格・田島木綿子・樽 創, 2021. 相模湾・東京湾沿岸で記録されたハクジラ亜目マイルカ科について. 神奈川自然誌資料, (42): 1-21.
- Hattori, K., 2015. *Callorhinus ursinus* (Linnaeus, 1758). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, T. Fukui, & T. Saitoh (eds.), The wild mammals of Japan, 2nd ed. pp. 295-296. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 服部 薫, 2020. 日本に生息する鰭脚類. 服部 薫編, 日本の鰭脚類: 海に生きるアシカとアザラシ. pp. 1-15. 東京大学出版会. 東京.
- 蛭田 密・濱野 真, 2001. 九州沿岸における鰭脚類の漂着・迷入・混獲について. 日本海セトロジー研究, (11): 15-19.
- Ishinazaka, T., 2015. *Eumetopias jubatus* (Schreber, 1776). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, T. Fukui, & T. Saitoh (eds.), The wild mammals of Japan, 2nd ed. pp. 292-294. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 磯野直秀, 1992. 東京国立博物館蔵「博物館図譜」について. 慶応義塾大学日吉紀要自然科学, (12): 73-87.
- 磯野岳臣, 2016. ニホンアシカの今. 海洋と生物, 38(3): 261-264.
- 磯野岳臣・服部 薫, 2022. トド 北太平洋沿岸・オホーツク海・ベーリング海. 水産庁・水産総合研究センター, 令和3年度国際漁業資源の現況, pp. 58-2-58-10.
- 伊藤徹魯・中村一恵, 1994. ニホンアシカの復元にむけて(9). ニホンアシカの分布の復元. 海洋と生物, 16(5): 373-393.
- IUCN, 2022. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-1. <https://www.iucnredlist.org>. (Accessed on 2023- October-1.)

- Jefferson, T. A., J. S. Leatherwood, and M. A. Webber, 1999. FAO species identification guide: marine mammals of the world. 山田 格訳. 1999. 海の哺乳類 FAO 種同定ガイド, 336 pp. NTT 出版, 東京.
- Jefferson, T. A., M. A. Webber, and R. L. Pitman, 2015. Marine mammals of the world: a comprehensive guide to their identification, 2nd ed. Academic Press, San Diego, California.
- 鴨川シーワールド, 1992. 海獣類の漂着記録. 鴨川シーワールド報告 I 業績集 1970-1991, pp. 347-349. 鴨川シーワールド, 鴨川.
- 鴨川シーワールド, 1996. 鴨川シーワールドニュース. さかまた, (47): 7.
- 金城芳典・谷地森秀二, 2022. 高知県産哺乳類リスト, 四国自然科学研究, (15): 70-73.
- 環境省, 2020. 環境省レッドリスト 2020. available from <https://www.env.go.jp/press/107905.html> (環境省ホームページ 環境省レッドリスト 2020 の公表について). (accessed on 2023- October-1).
- 加登岡大希・崎山直夫・石川 創・山田 格・田島木綿子・樽 創, 2020. 相模湾・東京湾沿岸で記録されたヒゲクジラ亜目 (Mysticeti) について. 神奈川自然誌資料, (41): 83-93.
- King, J. E., 1961. Notes on the pinnipeds from Japan described by Temminck in 1844. *Zoologische Mededelingen*, 37: 211-224.
- Kobayashi, M., 2015. *Erignathus barbatus* (Erleben, 1777). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, T. Fukui, & T. Saitoh (eds.), The wild mammals of Japan, 2nd ed. pp. 290-291. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, Japan; *Histriophoca fasciata* (Zimmermann, 1783), *ibid.*, pp. 288-289; *Phoca largha* Pallas, 1811, *ibid.*, pp. 282-284; *Phoca vitulina* Linnaeus, 1758, *ibid.*, pp. 280-281; *Pusa hispida* (Schreber, 1775), *ibid.*, pp. 286-287.
- 小林万里, 2020. 定住する鰭脚類: ゼニガタアザラシ. 服部 薫編, 日本の鰭脚類: 海に生きるアシカとアザラシ. pp. 102-122. 東京大学出版会. 東京.
- 国立科学博物館, online. 海棲哺乳類ストランディングデータベース. <http://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/drift/index.php> (accessed on 2023-October-1).
- 三谷曜子, 2020. 回遊する鰭脚類: キタオットセイ. 服部 薫編, 日本の鰭脚類: 海に生きるアシカとアザラシ. pp. 84-101. 東京大学出版会. 東京.
- Naito Y., 1976. The occurrence of the phocid seals along the coast of Japan and possible dispersal of pups. *Scientific Reports of the Whales Research Institute*, 28: 175-185.
- 中村一恵, 1993. 三浦半島に生息していたニホンアシカについて. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (22): 81-89.
- 中村一恵, 2000. 食肉目. 千葉県史料財団編, 千葉県の自然誌, 本編 7, 千葉県の動物 2, 海の動物, pp. 723-732, 754-763. 千葉県, 千葉.
- 中村一恵・山口佳秀, 1987. 真鶴岬で捕獲されたゴマフアザラシについて. 神奈川自然誌資料, (8): 77-80.
- 中村一恵・山口佳秀・平田寛重・浜口哲一, 1994. 神奈川県沿岸海棲哺乳類目録. 神奈川自然誌資料, (16): 1-9.
- 日本鯨類研究所, 1997. ストランディング・レコード (1997年5月~1997年7月受付). 鯨研通信, (395): 28-30.
- 日本鯨類研究所, 1998. ストランディング・レコード (1998年4月~5月受付). 鯨研通信, (398): 25-28.
- 日本鯨類研究所, 2002a. ストランディング・レコード (2002年2月~4月受付). 鯨研通信, (414): 25-28.
- 日本鯨類研究所, 2002b. ストランディング・レコード (2002年5月~2002年8月受付). 鯨研通信, (415): 30-38.
- 日本鯨類研究所, online. 鯨類ストランディング(座礁・漂着・漂流・迷入)・定置網混獲: ストランディングした鯨について. <https://www.icrwhale.org/zasho2.html> (accessed on 2022-September-1).
- Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, T. Fukui & T. Saitoh,

2015. The wild mammals of Japan, 2nd ed. xxvi+511 pp. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, Japan.

奥山康治, 2013. 「クラカケアザラシ」保護. *Enoshima Aquarium news letter*, **6**: 7.

忍田 中, 1980. 伊豆の博物誌 (2). 251 pp. 忍田 富, 熱海.

崎山直夫, 2013. 相模湾に現れたゴマフアザラシ. 自然科学のとびら, **19**(4): 25.

佐藤武宏, 2017. 日本の海の自然を詰め込んだ箱庭・相模湾. 自然科学のとびら, **23**(3): 22–23.

瀬能 宏・松浦啓一, 2007. 相模湾の魚たちと黒潮: ベルトコンベヤーか障壁か. 国立科学博物館編, 相模湾動物誌, pp. 121–133. 東京大学出版会, 東京.

鷺見みゆき・花上諒大・崎山直夫・鈴木 聡・石川 創・山田 格・田島木綿子・樽 創, 2022. 相模湾・東京湾沿岸で記録されたハクジラ亜目 (マッコウクジラ科 *Physeteridae*, コマッコウ科 *Kogiidae*, アカボウクジラ科 *Ziphiidae*, ネズミイルカ科 *Phocoenidae*) について. 神奈川自然誌資料, (43): 1–23.

寺沢文男, 2013. 迷子の迷子のオットセイ. *Enoshima Aquarium news letter*, **6**: 7.

寺沢文男・秋山大志・鯉江 洋, 2021. 相模湾で救護し仙台湾で放獣したオットセイについて. 生物資源科学, **30**: 25–30.

寺島浩一, 1961. アシカが訪れました. 自然のたより, (24): 3.

東海区水産研究所, 1985. 長期漁海況予報, 東海区, (66): 27.

山本康夫, 1990. 保護されたワモンアザラシ. 海のよこちょう, (19): 13.

---

崎山直夫・花上諒大・鷺見みゆき: 新江ノ島水族館, 神奈川ストランディングネットワーク; 鈴木 聡・樽 創: 神奈川県立生命の星・地球博物館, 神奈川ストランディングネットワーク; 石川 創: 株式会社大阪海洋研究所; 山田 格・田島木綿子: 国立科学博物館

(受領 2023 年 10 月 31 日; 受理 2024 年 2 月 9 日)